

あなたへの手紙

「魔法使いのチョコレート・ケーキ」M・マーヒー

森下みさ子

南に大きく開いた窓に面して、吹き渡ってくるさみどりの風をめいっばい受けとめ、身も心も緑に染まりながら、今お手紙をしたためています。あなたはあいかわらず、新芽のようにツンツン元気な子どもたちといっしょに、キラキラとまぶしい日々を駆けぬけていることでしょう。もっともこのお手紙が届く頃あなたは夏休み、一呼吸して空っぽの時間をもてあそんでいるかもしれませんね。わたしの方は、長年住み慣れてすっかり気持の通り合っていた古い木の家から、この五月、風致地区というところに越してきました。名前のとおり、あちこちが生まれた風が呼び集まってくるような、四方に風が行き交う街です。引越しの荷をほどこしていたら、箱につめられて窒息しかかっていた本たちの中から、待ちかねたように真っ先に外気を呼吸しはじめた一冊がありました。この街にふさわしい、風の魔法のこめられた本……マーガレット・マーヒーのお話集『魔法使いのチョコレート・ケーキ』（福音館書店）です。引越しのあいさつを兼ねて、あなたの一人の時

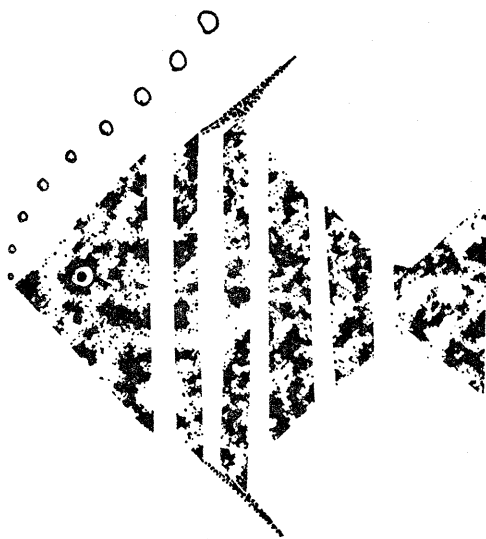
間に、そう、汗ばんだ頬にこちよい真夏の微風のように、このお話をそっと送り届けてみたくなってペンをとりました。

この本には、二つの詩と八つのお話が載せられています。そして、八つのお話全てに風が吹き渡っています。あばれん坊じみた風、いたずらな風、システリアスな風、さやさやとやさしい風、考え深い風、引っ込み思案な風……どの風もが魔力をもっていて、いえ、風そのものが魔法であり不思議なお話の源であるような、これは「風の作品集」なのです。お話はそれぞれに魅力的ですが、一つ一つに寄せるわたしの想いは、今度お会いしたときのわたしたちのおしゃべりの材料にとっておくことにして、今は一番最初に載っているほんとに小さなお話「たこあげ大会」をお届けすることにしましょう。

色あざやかな鳥のようなたこが大空に舞いとぶたこあげ大会の日、ただ一人たこをもたないジョーンは、丘を駆けのぼってゆく子どもたちのしんがりを走っています。手にはかあちゃんにもらった五ペニー銀貨を握りしめて……。そんなジョーンの目に街角に腰かけている一人のおばあさんがとまり、ジョーンは五ペニー銀貨でおばあさんから「夢と願いの」とてもちっちゃな宝の包みを受けとるのです。ジョーンがどんな女の子なのか、ちぢれっ毛なのか、そばかすがあるのか、やせっぽちなのか、何も描かれてはいないけれども、わたしにはわかる気がします。ジョーンは「たこがほしい」とだだをこねてかあちゃんを困らせるほどわがままではなくて、かといって歯をくいしばって耐えてみせるほどがまん強くもなく、たこを作れない不器用な自分を卑下するような自意識もさらさらなく

て、ただ五ペニー分の銀色の幸せと小さな心にポチリとあいたさみしさの穴ほこをかかえ
 たまま、たこがなくても子どもたちの一番びりを元気に駆けてゆくような子にちがいはあ
 りません。そのジョーンの心の穴に特別の銀色の鍵をさしこんで、扉の向こう側でいっばい
 にふくらんでいる夢と願いを、大空にさあっと広げてくれるのが魔法です。ほんとうに、
 魔法はこうして起こるのでしょうか。何も無いところに風がわき起こるように、突然、しか
 もさりげなく……。うらやみもねたみも気負いもない、ただ消し去りがたい夢と願いが潜
 かに鼓動している真っ白な心の前に魔法の銀の鍵は置かれ、求めている心はきつとその鍵
 に気づくことができます。ジ

ョーンが他のどの子も気づかなか
 ったおばあさんと夢と願いの文句
 に目をとめ、「わたしをおとり」と
 手の中に入ってきた特別な包みを
 選ぶとることができたように――。
 そのあと、丘にのぼって包みを
 あけたジョーンに、どんなにすて
 きなことが起こったか……。ちっ
 ぽけな包みはジョーンの小さな胸
 に秘められた夢と願いをいっばい



に吸いこんだのでしょう。とても大きなことになって、大喜びでぶつかってきた風を受けとめると、ジョーンを空高くもちあげます。そしてジョーンは、たくさんの緑の花のように広がった丘の向こう側に突然、世界のはてまでも目にするのです。青い草原と一列に並んで突進したり踊ったりしている白い一角獣、それは海とゆれ動く波でした。「夢と願い」「夢と願い」……風の声を残してたこあげ大会の一日は終わり、くたびれた風は「自分だけの秘密のあそび」を楽しむためにとび去ってゆきます。「たこあげ大会はおわたたのです」と短いお話は、この短いことばで括られています。

風の魔法には理由も説明もありません。それはふいに起こって、惜しみなく広がり、何事もなかったかのようにツイと消えるのです。空の旅がどんなにすばらしかったか、ジョーンの心にどれほど輝かしい想い出が刻み込まれたか、あれこれ問うのはやめておきましょう。マールヒーは、風の表情や身ぶりを実にもごとくに生き生きと描き出すだけで、ここらへんのことについては何一つ説明がましい表現をしていないのですから——。たっぶり遊んだ子どもが、「おもしろかった」とも「楽しかった」ともいう間もなく、くたりと眠ってしまうのに似て、このお話はふつりと終わるのです。けれども、いえ、だからこそわたしたちはジョーンといっしょに風の魔法を素肌で直かに感じとることができるのではないのでしょうか。そしてそのとき、このすばらしい体験はジョーンだけのものできない、日々風となって駆け廻っている子どもたちの、そして時には思いもかけずわたしたちも訪れる、あの天上高く駆けあがってゆくようなわきたつ喜びの体験であることに気づかされる

のです。小さな風たちのそばにいるあなたにはすぐにわかってもらえると思うのですが……。

マーヒーは、湖のように入り込んできている海と、向こうの緑の丘と空だけが見える。世界にこの家ただ一軒という感じの家に住んでいるそうです。そんなところに住んでいたら、ほんとうに自分が世界を吹き渡る風になったような気がするでしょうね。緑と青と白の世界、そこに銀色の滴をたらして吹きぬける風こそは、マーヒーのペンが生み出した魔法なのだと思います。

さて、八つのお話のうちどの風があなたの心の糸をかき鳴らすでしょうか。またいつかお会いしてお話しただけますように、その日を心待ちにしています。

五月

風の到る街のM

小さな風たちに囲まれているあなたへ

(お茶の水女子大学大学院)